

2017年10月 下野新聞

俳優・脚本家・アナウンサー
岩瀬 晶子さん



「気になる」とちぎ

俳優、脚本家、アナウンサー
1で宇都宮市出身の岩瀬晶子さんは、本県を舞台にした演劇を県内や都内で公演するなど、精力的に活動している。本県ゆかりの都内在住者らでつくる「東京県人会」の理事も務める。劇団や県人会の今後の活動について聞いた。(記事は25面)

話題の人に聞く

「芝居の力」を伝えたい

しもつけ随想

「気になる」とちぎ

宇都宮出身の俳優、脚本家、アナウンサー
岩瀬 晶子さん



俳優、脚本家、アナウンサーとして活躍する岩瀬晶子さんは、東京都文京区のホテル

「夕顔は夜に人知れず咲き、散っていく。とても切ないと感じました。けれども大きな笑を付けて

「公演を終えていかがですか。」
「とても好評でうれいんです。今回、『栃木は演劇の不毛の地』という声をよく聞きました。でも、きつかけがないだけなのだと思います。公演には児童養護施設の子供たちも招待しました。小さなうちに見てほしかったからです。芝居には人生を変えるほどの力がある、それがきつかけです。」

「演劇を始めたのはなぜですか。」
「アメリカの大学に通っている時、メキシコでストリートチルドレン支援のボランティアをしました。その時、流しの劇団がやって来たのです。私自身も体験して

「アメリカでは学問にもなっているドラマセラピーに取り組みたいです。芝居によって、押し殺されている感情やコンプレックス、トラウマを解放するというのが、私自身も体験して

「平均年齢60代後半という県人会の中で、若い理事になります。役割は。」

「脚本家としての仕事になります。以前、テレビ朝日のドラマ『警視庁捜査一課9係』で、栃木弁を取り入れたことがありました。さいいなことですが、東京にいながらできるPRはたくさんあります。県人会の30、40代が中心となって盛り上げられるような仕掛けや、雰囲気づくりができたと思っています。」

(聞き手、写真 小野裕美子)

「本県かんぴょう農家をテーマにした演劇『夕顔』の企画、脚本、主演を務めました。きつかけは。」

「演劇ユニット『日穂-bion-』を立ち上げて9年目となりますが、いつか故郷で公演をしたいと思っていました。私の学生時代は、栃木の名産品といえはイチゴというよりかんぴょうでした。県外ではかんぴょうがどんな風に見えるのかを知らない人が多く、これをテーマにして演劇ができないかと考えました。」

「かんぴょうからどんなイメージを膨らませたのですか。」
「夕顔は夜に人知れず咲き、散っていく。とても切ないと感じました。けれども大きな笑を付けて

「そこからイメージを広げ、演劇では命の尊厳、日々を大切に生きていくことなどを伝えられたらと思います。」

「公演を終えていかがですか。」
「とても好評でうれいんです。今回、『栃木は演劇の不毛の地』という声をよく聞きました。でも、きつかけがないだけなのだと思います。公演には児童養護施設の子供たちも招待しました。小さなうちに見てほしかったからです。芝居には人生を変えるほどの力がある、それがきつかけです。」

「演劇を始めたのはなぜですか。」
「アメリカの大学に通っている時、メキシコでストリートチルドレン支援のボランティアをしました。その時、流しの劇団がやって来たのです。私自身も体験して

「アメリカでは学問にもなっているドラマセラピーに取り組みたいです。芝居によって、押し殺されている感情やコンプレックス、トラウマを解放するというのが、私自身も体験して

「平均年齢60代後半という県人会の中で、若い理事になります。役割は。」

「脚本家としての仕事になります。以前、テレビ朝日のドラマ『警視庁捜査一課9係』で、栃木弁を取り入れたことがありました。さいいなことですが、東京にいながらできるPRはたくさんあります。県人会の30、40代が中心となって盛り上げられるような仕掛けや、雰囲気づくりができたと思っています。」

(聞き手、写真 小野裕美子)

かんぴょう農家再生物語

宇女高OG俳優が企画、県内初上演へ

栃木の特産「かんぴょう」をつくる農家を描いた舞台公演が今月、宇都宮女子高校OGの手で県内で初上演される。家族の再生をテーマに描いた作品で、8月には東京で公演された。出演者9人のうち4人が宇都宮市出身で、息のあった栃木弁でのやりとりも見どころの一つだ。

稽古中、全出演者が作業体験

タイトルは「夕顔」。企画と脚本を担当したのは、宇都宮女子高校を1991年に卒業した俳優の岩瀬晶子さん。岩瀬さんは2008年から演劇集団「日穂bion」を主宰、自ら

も舞台に立っている。NHKラジオの英会話講座では藤本ケイとしてナビゲーターをしている。

「夕顔」は栃木のかんぴょう農家の川上家で、両親の跡を継いだ長女を主役

に、姉妹がぶつかりながらもある事件をきっかけに再生していく物語。岩瀬さんは昨年3月に実母が急死した。今年と同級生2人が続けて亡くなり、「自分もいつどうなるか分からない。この瞬間を後悔しないように生きなければ」と思ったことが、この物語を作ったきっかけだと話す。8月に行った東京・中野での公演は好評で、手応えをつかんだ。



母校、宇都宮女子高校へ公演の報告に来た岩瀬晶子さん。宇都宮市操町

題材を考えた時、頭に浮かんだのが自身が生まれ育った土地の名産「かんぴょう」だったという。夕方咲き始めて朝には散ってしまつた夕顔のはかなさを丸々とした大きな実「ふくべ」ができるおかしさのギ

ャップにもひかれ、舞台のタイトルにもした。脚本を執筆する中で、上三川町のかんぴょう農家取材し、稽古中には出演者全員で朝早くから農家に出向き、かんぴょうむきなどを体験した。

公演は岩瀬さんだけでなく、宇都宮市にゆかりのある役者が出演する。劇団だるま座主宰の剣持直明さん(53)は宇都宮東高、テレビや舞台で活躍中の山本南伊さん(36)は宇都宮北高、劇団張ち切れパンダ所属の中島愛子さん(36)は陽東小・陽東中出身。岩瀬さんは「笑えて泣けて、最後は少し心が温まる舞台です。地元での公演を楽しみにしています」と話す。

公演は27日午後7時と28日午後2時、県総合文化センターで。一般は3千円、高校生以下2500円。詳細は同センターのホームページ(<http://www.sobun-tochigi.jp/2816.htm>)で確認できぬ。(佐藤太郎)

岩瀬晶子(宇都宮出身)が企画・脚本

俳優・脚本家・アナウンサーとして活躍する宇都宮市出身の岩瀬晶子が企画・脚本を手掛ける演劇ユニット「日隠(ひかく)bon」の第9回公演「夕顔」が9月27、28の両日、県総合文化センターサアホールで開催される。本県出身の俳優も3人出演。ふるさとでの初めての公演に岩瀬は「一度は地元で舞台をやりたい」と思っていた。感情を持って演じるお芝居を生で鑑賞すると、びんびん伝わってくる。栃木の人たちにそういう感覚を味わってもらいたい」と来場を呼び掛けている。(内藤大地)

演劇「夕顔」

かんぴょう農家舞台に

物語の舞台は、栃木県でかんぴょう農家を営む川上家。夏の収穫期には三女母や隣人たちがやってくる。長女夕子の作業を手伝うのが毎年の恒例となっている。そこに何年も音沙汰がなかった次女夏実が突然姿を現す。久しぶりの再会を喜ぶ母子たちは裏腹に、夕子だけは夏実と目を合わせ

来月宇都宮で公演

ようとしめない。それぞれが秘密を抱えながら集まったある夏の日の物語を描く。長女役で出演する岩瀬は「せつかくやるんだったら栃木の話にしたい」と思った。日々を大切に生きていきたいなど感じてもらえる舞台にしたい。皆さん素晴らしい役者さんなので、演劇を見たこ



俳優陣 本県出身3人も稽古に熱

ふるさとでの公演に向けて意気込む(左から)剣持、岩瀬、中山、山本

出演者は県内のかんぴょう農家取材し、作業を体験して役作りの参考にしたいという。本番に向けて稽古に熱がこもるが、稽古場では栃木トックで盛り上がりつつあるという4人。剣持は「お芝居は面白いと思ってもらえるきっかけの一つになったらしい」、山本は「高校生や若い人にも演劇に触れてもらうチャンスになれば」、中山は「地元に残っている同級生が観に来てくれたらうれしい」とそれぞれ意気込みを語った。27日は午後7時、28日は午後2時開演。チケットは一般3千円、高校生以下2500円(全席自由)。チケットの予約は080・4659・2008、メールはjintoi-ochig@bon.jp。宇都宮公演に先立ち、東京公演が同月23、27日に中野区のシアトルBONBONでも行われる。

9月30日、10月1日 富山で舞台「月の海」

内浦純一(富山出身)が主演



「家族へ感謝の気持ちを持つ大切さを伝えたい」と語る内浦純一—北日本新聞社

家族へ感謝の気持ち

富山市出身の俳優、内浦純一(41)が主演を務める舞台「月の海」が、9月30日と10月1日の

両日、県民小劇場オルビスで開かれ、介護を担う家族や命をテーマにした物語を繰り広げる。

作品は、実家で認知症の母の介護に専念する女性、望月静や

北日本新聞社を訪れた内浦は「人生はいつか終わりを迎える。生きている今、周りの人に感謝する大切さを伝えたい」と話している。

内浦は富山商業高、神戸学院大卒で、俳優の仲代達矢が主宰する「無名塾」で学んだ。今回の舞台は演劇ユニット「日穂—bion—」の第8回公演。毎回、女優アオウンサーとして活動する岩瀬晶子が脚本を手掛けている。内浦は3回目の出演

芸能

✉ bunka1@ma.kitanippon.co.jp

◆ 公演は9月30日午後7時、10月1日正午、午後3時半から。チケットは全席自由で一般3千円、高校生以下2500円。チケットの申し込みは「日穂」のホームページ(<http://bion.jp>)などで受け付けている。問い合わせは「日穂」、電話080(4659)2008。北日本新聞社後援。

連合国軍総司令部（GHQ）を説得し、編集者として戦争の悲惨さを訴える「ビルマの豎琴」を世に出すなど、戦後の児童文学界に影響を与えた故藤田圭雄氏（1905～99年）。孫の岩瀬晶子さん（43）は「戦時中に反戦を訴えられなかった後悔が、戦後、祖父を突き動かしたのでは」と言う。そんな「反戦」を継ぐ思いを、岩瀬さんが戯曲「明日花」にしたためた。（池田悝一）

祖父の「反戦」引き継ぐ

戦意高揚の絵本を描いた児童文学作家が戦後、自責の念に駆られて苦悩する姿を描いた。

今月十八日夜、東京都内のビルの一室。岩瀬さんが主宰する劇団日穂の稽古は熱がこもっていた。

「俺が戦時中に書いたもん読んで、たっさんの少年たちが戦場に行って死んだんだ！」

「でも私たちがみんなが、お国のために鬼畜米英をやっつけろと熱狂しとりました。流されてしまっていた。だからこそ、あの戦争を体験したあなたに、もう一度書いてほしいがです」

舞台設定は終戦から五年後の東京近郊。フィリピン戦線から帰還した作家が、慣れない土地で元の職業を隠し偽名で暮らしていたところ、再会した元妻に再びペンを執るよう背中を押される場面だ。

元妻役は岩瀬さんが務める。「祖父が戦時中、戦意高揚につながる文学に携わったかは分からない。だが、反戦を訴えることほど

「ビルマの豎琴」編集者の孫 文学者の「自責」戯曲に



◎脚本も書き、出演する岩瀬晶子さん（左）。主人公の児童文学作家（右）に、祖父の故藤田圭雄氏を重ねる
◎「明日花」の一場面＝東京都新宿区で

「活字が人殺しの道具に」

文学者協会名誉会長や日本童謡協会名誉会長を歴任。戦時中は徴兵されることなく、出版社で児童文学を担当する編集者として、つづり方読本の発刊などに関わった。

そして終戦翌年、仲間と少年雑誌を立ち上げ、文学者の故竹山道雄氏に執筆を依頼。書き上がったのが、ビルマの豎琴だった。しかし当初はGHQの検閲で掲載が認められなかった。

藤田氏の長女で岩瀬さんの母敦子さん（60）は「GHQからは『戦争を美化している』という理由で止められたよつだが、父は『違ふんだ。反戦を訴える作品なんだ』と言いつつ、GHQに日参していた。掲載許可になった日のことを後年、

「見上げた空に真っ白な雲が浮かんでいて、とてもきれいだ」と懐かしんでいた」と振り返る。

戦後七十年、岩瀬さんは「無口で穏やかだった祖父

がGHQに掛け合ってまで訴えた反戦を、私も訴えたい」と思い、今回の戯曲のテーマに「ペンと戦争」を選んだ。

戦争経験者二十人以上を取材する中で、祖父のいた文学界、新聞界などが、軍部の思惑に沿う形で戦争に加担して被害者を増やすことになったと知った。

戯曲は、児童文学作家が戦後、花火店の主人とともに、花火大会を再開させる過程を描く。終盤、花火店の主は作家にこうつぶやく。「人を笑顔にしてえと思つて、花火師になったんだ。だが、戦時中は火薬は全て爆弾になつちまつた。同じ火薬が人を笑顔にするものにも、殺す道具にもなる。活字も一緒なのかもな」

公演は東京・中野の劇場MOMOで二十六日、九月二日。問い合わせは日穂☎070(6519)7904へ。

きなかつたはず。そんな後悔が、戦後の行動につながるのでは」



藤田氏は児童文学や童謡の編集者、作家、研究者として長年活躍し、日本児童

平和の尊さ

考える契機に



「平和を考えるきっかけになればうれしい」と語る内浦純一（左）と岩瀬晶子—北日本新聞社

内浦純一(富山県)主演舞台「明日花」 18、19日 オルビス

戦後の花火大会が題材

選を待っていた良夫の妻(岩瀬)がこの町にやってくる。富山空襲について語る場面がある。演技の参考にするため、内浦と岩瀬は7月末から8月初めにかけて富山市内を訪れ、富山空襲を体験した男性から話を聞いたり、図書館で空襲について書かれた本を読んだりした。8月1日には戦没者の鎮魂と復興、平和への願いを込めて毎年行われている「北日本新聞納涼花火大会」の会場も訪れた。

「花火も爆弾も同じ火薬が原料なのに人を笑顔にしたり、逆に人を苦しめたりする。美しいものを凶器にする戦争は、絶対に繰り返してほしくない」と内浦は力を込める。

同級生から支援

富山公演に先立ち、8月26日から9月2日まで、東京都中野区の劇場で11回上演した。90人収容の会場は全ての公演でほぼ満席となり、キャンセル待ちも出た。岩瀬は演劇を見ていただいた方の口コミで、公演を重ねるごとに観客が増えた。見られなかった人の中には、北陸新幹線に乗って富山公演に行きたいという人もいたと喜ぶ。

内浦はこしデビュー14年目を迎えた。映画やテレビドラマに多数出演してきたが、県内の舞台公演で主役を演じるのは初めてとなる。今回の公演では、小中学校、高校の同級生たちが舞台セットの組み立てや、チケットの販売などを手伝ってくれることになった。「富山の皆さんに支えられて活動していることにあらためて気付いた。感謝の気持ちを胸に、一生懸命に演じたい」と話した。

公演は北日本新聞社後援。18日は午後7時、19日は正午と午後3時半に開演する。チケットは全席自由で、一般3千円、高校生以下2500円。鑑賞希望者は事前に電話かメールで公演事務局に申し込む。電話は070-(0)10-7004、メールはinfo_toyama@bion.jp

今回の「明日花」は、終戦から年たった関東のある町が舞台。フィリピン島のルン島から復員した主人公・良夫(内浦)は、戦争で十数年間開かれていない町の花火大会を復活させたいと考えていた。この町は、軍隊の部下でルン島で戦死した清の生まれ故郷。生前、清は美父の跡を継ぎ「花火師になりたい」と良夫に言っていた。良夫は清の思いを胸に、花火大会の準備に奔走する。



東京公演に出演する内浦(左から2人目)。花火大会の開催に奔走する男性を演じる内浦(中野区「劇場MOMO」)

内浦が戦争に関する芝居に出演するのは初めて。戦地で飢えに苦しむ良夫が、富山の豊かな食卓を思い出すシーンでは、演技にリアリティを持たせるため、食事の量を減らして白米を口にしたかったという。「戦時中の環境とは全く違うけれども、当時の人たちの思いに少しでも近づきたい」と振り返る。

演劇の後半、富山で夫の帰りの同級生たちが舞台セットの組み立てや、チケット

シアター



女優で劇作家の岩瀬晶子「写真」が主宰する演劇ユニット「日穂」が29日、9月4日、舞台「かわたれの空」(岩瀬作、たんじだいで演出)を東京・中落合のシアター風姿花伝で公演する。戦後の復興期に力強く生きる人々とそれでも残る戦争の傷跡が交差する。サンフランシスコ講和条約が発効し、日本が国際舞台に復帰した1952年。ある港町に事故で

「かわたれの空」で戦争の痛み表現

記憶を失った男が運び込まれる。男は9年前に町から出征した男で、妻は懸命に夫の記憶を呼び戻そうとするが、男には町に帰ってこれない理由があった。

妻役も演じる岩瀬は「戦争に翻弄された家族を描こうと思った」。送られた戦場・フィリピン諸島での記憶が男の心を苦しめる。「戦場での自分の行為を責めて生きた人もたくさんいる。戦争では時に加害者にもなってしまうという痛みを表現できれば」

ただ、復興に生きる港町の人々の明るくて軽妙なやり取りも見どころ。「基本はエンターテインメント。構えずに見に来てほしい」。問い合わせは070・65119・7904へ。【木村光則】

